セーヌ川の夕暮れ。ノートルダム大聖堂（中央右下）のシルエットが浮かび上がる

撮影・金井三喜雄

旅 心の風景

パリ

岸恵子さん

旅の果て、心に輝く映像群

私は横浜生まれの横浜育ち。丘の上の原っぱにれんげ草が咲きたんぽぽが群れ、まだ潮の香りがただよう海があった。花電車が出る祭り日には、祖父が幼い私を肩車に乗せ、花火の音や祭囃子に拍子をとり、人混みを踊りながら歩いて私を喜ばせてくれた。ピーヒャララ、ヒャッ、ヒャッ。着流しの祖父はまだ若く、飄げていて小気味よかった。

歳月が流れ、私は巴里に住む身となった。ある日、夫の友人がつぶやくように言った。「人生なんて、所詮は数コマの映像にしか過ぎない」。ブルーの瞳に皮肉な笑みを泛べる孤独の似合う人だった。少し嗄れた声が祖父を憶い起こさせた。

けれど、若い私にはその言葉が気障にきこえた。

時はまた容赦なく流れ、友人は死に、私とは既に離婚していた前夫が、ある日私の好きなシャンペン、クリスタル・ロードレルを届けてくれた。「君が旅から帰ったら一緒に飲もう」。セーヌ河畔の石畳の道で私を振り返りにこっと笑った。それが彼を見た最後となった。私が旅から帰ったとき、彼はもうこの世にいなかった。

私は僻地放浪の好きな女となった。心に棲みつく風景は無数にあるとも言えるし、一つもないような気もする。

音もなく、青く光っていた横浜の海。空襲で焼けただれた廃墟の横浜。そこに昇った黒い石柵のような太陽。父の顔、母の顔、それらにオーバーラップするさまざまな風景の中の顔。一日に二トンの煤が降る悪名高い工業村ルーマニアのコプシャミカで寒さに震える私を囲んだジプシーの子ら。煤で汚れた色白の、いちばん年嵩の少女があかぎれでひび割れた両手で、手袋をはめた私の手を包み息を吹きかけて温めてくれた。彼らは零下一五度の酷寒極貧の中、裸足で木靴を履いているのに――。

また、体より大きい買い出しの荷を背負い、眼にチカチカ光るアイロニーを泛べハモニカを吹きロシア民謡を歌ってくれた、ベラルーシのおばあさん。聖ペテルブルグ行列車の窓には渺漠とした草原が流れていた。

人生はたしかに抱えきれない数十コマの映像なのだと思う。

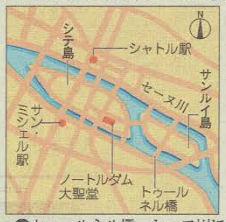
それらは今、あかね雲に覆われた巴里の空に浮かんでは消え、残照を浴びて黄金色に輝き、やがては夜の中に呑まれ落ちる。これらの映像こそ私の心に咲くゴージャスなラストシーン。

祭囃子の音頭が聴こえる。ピーヒャララ、ヒャッ、ヒャッ。

きし　けいこ　女優。1932年横浜市生まれ。映画「君の名は」「雪国」「おとうと」などに主演。著書に「巴里の空はあかね雲」「ベラルーシの林檎」「砂の界へ」など。パリ在住。

メモ

●**ノートルダム大聖堂**　1163年パリ司教シュリーによって起工され、約200年かかって完成した。彫刻、ステンドグラスは美術史上でも重要。



●**トゥールネル橋**　セーヌ川に浮かぶサンルイ島左岸に架かる橋。橋上の塔にパリを守る女神と言われるサンジュヌビエーブの像がある。

●**革命記念日**　7月14日。日本では「パリ祭」で知られる。当日は凱旋門からコンコルド広場まで、軍事パレードや、辻々にあふれる市民の踊り、大道芸でにぎわう。